

## 『いたみ』

課題をやらなといけないけれど、私は寝ずにスマホを触っていた。時計の針は3を指していた。部屋のドアから音が鳴る。父が苦しそうにしている。保護者として私が付き添うことになった。静かに救急車が到着した。どうすればいいかわからず、邪魔しないようにそこに存在していた。受け入れ先が見つかり、走り出す。いつも聞いている救急車の音ではなく、音程は一定だった。同時に父の心音がビートを刻む。それに合わせて周りの医療機器も揺れる。父は横たわって、辛そうにしている。私はマスク越しに鑑賞する。存在しないはずの匂いを感じる。父は8で死は10であった。父と目が合い、私と繋がった。不安と安堵が一つになった。病院に着くと父は診察室に連れていかれ、私は受付に行った。父の情報を入力する。そうか、もうすぐ50か。

誕生日少し豪華にお祝いするか。最近仕事が忙しそうだったからな。そういえば、父が泣いているところを見たことがない。嬉し涙も悲しい涙も。私はよく泣く。父はお風呂が早い。私はとても遅い。父は音楽ライブに行かない。私は音楽ライブによく行く。私と父の違いを探していた。父は私によく似ている。私が二人いるみたいで鬱陶しい。頭の中で一点を見つめる。父をずっと待っている。そして、なにか大事なものを忘れている。

## コメント

この作品はフィクションではありません。私が実際に経験したことです。

テーマはコロナと不完全（未完成）です。

わざと不完全な「し」にすることで考えるプロセスを読者に与えることができ、作品に深みと多様性が生まれます。また、昔の人は建物を作るときに「建物は完成と同時に崩壊が始まる」という伝承から、わざと柱を未完成の状態にすることで災いを避ける、魔除けのために逆柱にしたとされています。これを参考にして、「し」を不完全（未完成）にして、各所に完全ではないものが存在しているという経緯があります。それが完成してしまつては「し」は崩壊してしまいます。これは固い規則が存在する詩とは真逆の行動をとつてしまっているかもしれません。

人の日常は当たり前に溢れています。当たり前の価値というものは失ったときにしか感じる事ができません。新型コロナウイルスによって、私たちは当たり前にあった日常を壊されてしまいました。しかし、当たり前の価値を見直すきっかけが生まれました。私たちは新たな日常を作っている途中にあると思います。そして、これから新たな日常は当たり前になり、その価値は平面に見えることでしょう。

国際日本学部 歴史民俗学科1年 岩田 勇輝